

10th ハラタケ目の 日本における 調査状況

滋賀大学名誉教授 本郷 次雄

今関・本郷編著：原色日本新菌類図鑑，保育社（1987）の4ページに、「ハラタケ目は現在までに日本から1000種あまり報告されているが、なお未知の種類がはなはだ多く、実在数はおそらく3000種を越えるものと推定される。」と述べられているが、この状況はここ10～20年来ほとんど変わっていない。日本の調査レベルが欧米の域に達するまでには、今後100年かかるかも無理であろう。上記の図鑑の序文にもあるように、「旧著出版以来20年以上を経過したが、海外における進歩の目覚ましさに対して、日本の菌学は依然として低調である。特に生物学の出発点である分類学、その中でも第三の生物界である菌の分類学は低調であり、研究者の層の薄さははなはだしい。しかし少数とはいえ無心な研究者も生まれた。」そして年々少しづつ種類が解明されていくことは事実である。日本産ハラタケ目を通覧すると、調査のかなり進んだ群もあればきわめて後れた群もあり、一様には前進していないことがわかる。かなりか、あるいはおそらく半分以上の種類が解明されていると思われる群としては、たとえばヌメリガサ科、サマツモドキ属、キシメジ属、ナラタケ属、テングタケ属、フクロタケ属、ヒトヨタケ属、フミヅキタケ属、イグチ科など、があげられる。ヌメリガサ科のうち温帯以北の種類は、現在比較的よく調査されているようであるが、暖

帶以南には同科アカヤマタケ属の未知種がかなり残されているようである。テングタケ属やイグチ科は南西諸島や伊豆諸島などを除いた地域では近年よく調べられている。西表島などはまさにきのこ類の宝庫ともいるべき別天地で、今後の集中的な調査が期待される。しかしそれと同時に、中国南部からヒマラヤ、東南アジアにいたる地域の常緑カシ林の調査をも進めないことには、南西諸島などの菌類フローラの解明は困難であろう。ヒトヨタケ属は主として青木実氏の研究によって、現在日本で40種近くが知られていることは特筆すべきである。調査の後れている群はカヤタケ属、モリノカレバタケ属、ホウライタケ属、クヌギタケ属、ハラタケ属、キツネノカラカサ属、アセタケ属、フウセンタケ属、ケコガサタケ属、イッポンシメジ属、ベニタケ属、チチタケ属などの大属が多い。日本では現在までに、クヌギタケ属がほぼ40種、フウセンタケ属がほぼ70種、アセタケ属・ベニタケ属・チチタケ属がそれぞれ50～60種報告されているが、将来調査が進めば種数はこれらの数字の少なくとも2～3倍には達するものと予想される。フウセンタケ属ではツバフウセンタケ亜属(*Telamonia*)に属する種の分類がなかなか困難である。ベニタケ属・チチタケ属は、温帶以北の種類はかなり調べられているので(とくに北海道において)、今後は暖帶以南の常緑

カシ林のものの調査に力を入れるべきではないだろうか。この場合も前述のように、中国南部～東南アジアの常緑カシ林の種類の調査も平行して進める必要があろうと考えられる。ベニタケ属ではとりわけ赤色の種類が分類困難である。日本では研究者の層が薄いとは言うものの、筆者がきのこ学を志した50年前に比べれば、きのこ分類学に興味をもつ若い世代の人が著しく増えてきた。ハラタケ類の分野でも、ヒダナシタケ類、腹菌類、子囊菌類などの分野でも、現に何名かの研究者が活躍中である。とはいって、これは最低の研究者数であって、このままでは日本のきのこ相がほぼ100%調査される日は100年経ってもこないであろう。ただ、現在かなり調査が進んでいると思われるヌメリガサ科、キシメジ属、テングタケ属、ヒトヨタケ属、イグチ科など少數の菌群に限れば、近い将来日本産種のモノグラフが完成する可能性は十分考えられる。隣の中国では、中国科学院を中心になって各地の総合調査が行われ、しばしばりっぱな研究成果が刊行されている。おそらく国家的事業としての資源調査であろうから、政府の力の入れようは日本とは全く異なることだろう。広大な国土を擁する中国ではあるが、菌類フローラの調査は日本に比べてずっと速いテンポで進行しているものと思われる。

本稿は「平成9年度熊本きのこ会年報(1997)」所載の拙文を多少修正再録したものである。)